

2023年1月の総評に代えて

○林 桂○

●さいう●(愛知県 17歳)

引き止めることば  
を  
むりに飲み込んで  
つつじが胸にざらついている

【評】最終行「つつじが胸にざらついている」が、前を受けながらもイメージを飛躍させている。「つつじ」が何とも意外で、かつ説得させられる。

●立花ばとん●(東京都 21歳)

冬の陽  
缶詰の文字が  
曲がって  
いる

【評】缶詰の曲面に印刷された文字。みな曲がらざるを得ない。冬の鈍い光に、ハ弱いハイライトを宿している。最終行の「る」が、缶詰の裏面に隠れそうな趣を伝えていて、笑いを誘う。

● 源 楓 香 ● ( 北 海 道 21 歳 )

誰しもが街の一部でありながら  
誰を欠いても成立する街

【評】稀薄な人間関係でなりたつ「街」の本質が言い止められている。街の中では、誰も、その他大勢とならざるを得ない。

● 青野陽 ● ( 熊 本 県 20 歳 )

純情を揺らすみたいに髪を結う  
青春すべてが私のためだ

【評】与謝野晶子の「その子二十(はたち)櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな」の現代版のような作品と思って採った。本当に二十歳の作者だったことに驚いている。

● からすまあ ● ( 神 奈 川 県 19 歳 )

挨拶は弾むみたいにするべきと  
誰かが言って護岸には波

【評】挨拶の心得としては、明るい声で元

気なのがいいに違いない。しかし、「誰かが言って護岸には波」と、我が事ならぬ体の作者の思いもわかる。

●小沢旭●（山梨県 21歳）

君が前、教えてくれたあのバンド  
覚えてたのは、俺の方だけ。

【評】友達が教えてくれた物事が、その後自分の中で大きな存在になっていきゆくことがある。友達が教えてくれたバンドもその一つだろう。しかし、友達はそのことすら覚えていない。友達にとっては、当時の最新情報に過ぎなかったのだろう。よく経験するあるあるでもある。

●あお●（奈良県 24歳）

放たれる風を言葉にするために  
鼓膜をぴんと張りなおす冬

【評】凧、凧、虎落笛。冬の町には風の音があふれている。それを自身の思いに溶け込ませ、言葉に翻訳しながら私たちの日々がある。

● いまはじまるの ● (兵庫県 24 歳)

手のひらに乗せる石ころ  
探してます  
冷たさだけを分けてあげるね

【評】手に乗るサイズの「石ころ」ならばなんでもいいのだろう。渡すのは、石ころではなくて、石ころの持っている「冷たさ」なのだから。求めているのは体感の共有だろう。

● 吉沢 美香 ● (宮城県 23 歳)

今朝の冬半透明の黄の付箋

【評】少し高価になるが、透明な付箋を使うことがある。頭に色々な色がついて、使い別けられる。付箋に下の文字が隠れないで判読できる。「今朝の冬」「黄」がフレッシュに響いている。

● にゃー ● (群馬県 43 歳)

夜明け前に  
食べる  
ミントあめ  
朝の空気が

静かにとおる。

【評】ミントの涼感が鼻に抜ける。「朝の空気が/静かにとおる。」のだ。それにしても、「夜明け前」という不思議な時間帯。夜のワークの眠気覚ましだろうか。

● 玻璃 ● (愛媛県 22歳)

春祈るように子犬を買いました

【評】子犬や子猫と生活を始めようとするのは、祈りの変種かもしれない。この作品に出会ってそう思った。

● 日下部 友奏 ● (群馬県 17歳)

山眠る 街真夜中を持って余す

【評】冬の山。自然は眠りにつくことを知っている。しかし、街は夜でさえも眠ることを知らない。「持って余す」には、コントロール不能な街の風景が描かれている。

● 篠遠 早紀 ● (東京都 24歳)

恐竜の化石見上げる旅始

【評】非日常を求めての旅。すぐ風光明媚な景勝地や異国を思い描くが、恐竜の化石の風景も確かに非日常に違いない。恐竜の化石の展示で知られる博物館はいくつもある。